

162歳の引越し(2)

終の住処となるだろうこの地に住んで40日になります。

30年前、「自然の中に住みたい！」それは私が最もエネルギーであった頂点で叫んだ言葉はでした。その時の私は狂いそうになっていた。天空に向かって大声で叫んだことを思いだす。その翌日、山の土地が与えられた。

この場合の自然は何を意味していたのだろうか。近代が用意してくれた便利さのすべてを捨てて、不便さを選んだ。妻には大変な苦勞をかけてしまった。多くの人から不思議がられた。

鳥の声、野の花、闇を抜けるような大空、川のせせらぎ、自然の恵みを満喫した日々である。そこから近代の凝縮した職場に向かう。7年間は自分で運転をして職場に通った。そして奇跡が累乗的な交通事故を起こしました。バイクと



衝突、両者の車は大破、多くの方は死亡事故が発生したと思ったくらい爆音が轟いた。しかし、青年は無傷であった。相手方の過失は20%位だったが事故を取り消してくれた。変な言い方ではあるが、事故を起こした場所にも恵まれていた。現場の近くに（株）ニューオート社（社長 堤 雄二様）がおられ、爆音に気づいて駆けつけてくださったのです。事故処理は全てお任せして私は警察に出頭しました。調書を作成してくれた警察官が「あなたはラッキーな人だ。これは死亡事故が普通だよ」と言ってくれました。大破したオートバイは堤社長さんがお世話してくださっていた保険会社が全ての面倒を見てくださり、私は事故処理から解放されました。

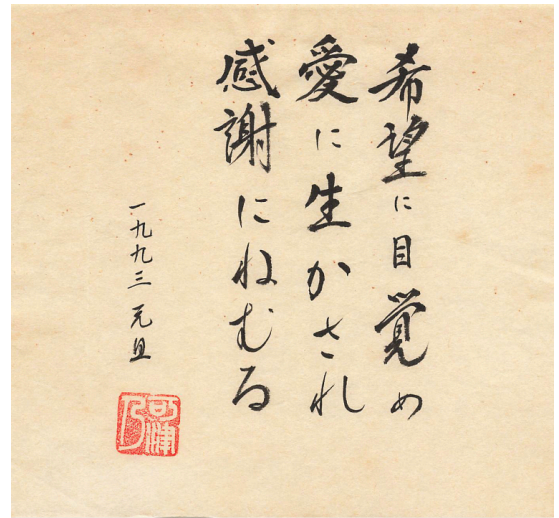
翌日、私は自動車免許を返納しました。それは何を意味するか。妻の運転に100%依存する生活となったのです。楽といえば楽、不自由といえば不自由ですが、私の我儘は100%受け入れてくれました。時が経ち、妻の運転も限界間近になり、他の要素も加わって山を降りることになりました。二人合わせた年齢は162歳、その引越しも多くの人に不思議がられました。

10月31日妻は長年の愛車を手放しました。堤さんが引き受けてくださったのです。

感謝という言葉では言い表せないほど、多くの人に支えられ、恵みに満ちた人生が今も、新しい地で続いています。

「日々、快晴です」母が晩年に書いてくれた書の通りになっています。

住所地が「小田原パーク・ホームズ」となっているので、ホームに入ったと言っても間違いはないので、そう言った方が良い場合はそのようにしています。この話には続きがありまして、孫娘が「ジーじたちが引っ越すのは施設のホームだと思っていた」ということです。これが普通感覚です。私はホームを誇りに思っています。



まず、「静か！」小田原駅から徒歩6分ですが騒音はゼロ、カラスの鳴き声はありますが。

500m以内には日常生活に必要なものは全て揃います。一番の変化は「ドンキホーテ」の存在です。散歩コースに入れています。何があるのか一種の冒険宝探しのゲームをしているようで面白いです。文具類の在庫を持たなくてよくなったことも大きなメリットです。アマゾンへの依存率がかなり低くなります。

ユニクロの自己清算システムを利用するのもこれからの買い物方式が学べます。

コンビニはもちろん「成城石井」もあります。「讃岐うどん、駅横の美味しい蕎麦、たこ焼き店」、ないものは在庫の豊富な書籍店と大型電気店くらいです。

小田原の町ではまだ自転車が少ないので安心して歩道が歩けます。図書館が3分という距離ですから、本は慎重に買うことにしています。タクシーに恐縮することなくなりました。これは大きなストレスレスです。歩けることで完結する生活の快適さを満喫しています。

生活は既に「引き算の世界」に入っていますから、家賃を捻出するには足が頼りです。

「歩く探すエコノミー」が原則です。この生活環境の変化は考え方にも大きな影響を及ぼしています。「自分の頭脳で考えることをやめよ」「自分でなんとかしてあげよう」という自惚れた考えをやめました。それでは「～～ファスト」という自己中心になるようですが、幸いにして教会が徒歩10分内にあります。日曜日と水曜日の午前には招かれて足が向きます。終の住処は終わりの日に向かうには最適の場所となっています。

日常生活で没頭できることも沢山あって時間が足りません。ノルマ的な目標はありませんが目的には軸足をおいて「ヘブライ人への手紙に学ぶ」（松山幸生著）を写書して聖書を学んでいます。「今、ここを」生きることが出来る最高の時期であり場所にいます。

多くの人々が私たち夫婦の姿を見て豊かな家系育ちだと感じておられるようです。それは一面ありがたいことですが、どれだけ妻の困窮と忍耐に支えられたか。人生は喜怒哀楽が平等に与えられています。高い喜びは深い苦しみの結果です。神様は「人に耐えられない

試練はお与えにならない」ので、今、苦しい環境にあっても、底から這い上がらして下さる力が与えられます。そのことを体験的知識をして語れることは幸せです。

「すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです。」

(ローマ信徒への手紙11章36節)

「万物はこの神から出、私たちはこの神へ帰っていくのです。」

(コリント信徒への手紙18章6節)

(部分的な聖句を自分の都合のよいように引用することは慎むべきですが、ここではその禁則を破って引用しました。用いた聖書は「新共同訳」です。)

ベストピアは当初の目標でありました480号を超えました。誰宛に書いているのか、読者の対象は変化しています。当初は学習塾の宣伝のためご父兄宛に、その後は顧問先様宛に「スピーディで有益な情報の提供」をしてきました。その後は孫の成長に合わせて高校生に歴史に参考になる情報を、ある時は悩める同僚に宛てて書きました。今は自分宛に書いています。このような個人的なベストピアに華を添えてくださっているのが「パリ通信」です。今月もカラバッジョが展開されて興味が尽きることがありません。多くの人々のお支えに感謝です。

パリ通信・第155号

ナポリのカラヴァッジョ

11月1日「万聖節」のバカンスを利用して南イタリア・ナポリに行った。ルーアンの「キリストの鞭打ち」を見て、ナポリ・カポデイモンテ美術館所蔵「キリストの鞭打ち」はぜひ見たいと思った。

「ナポリを見ずして死ぬことなかれ」とはゲーテの言葉だが、ヴェスヴィオ山を望むナポリ湾は風光明媚な地で複数の異なる文化を生きてきた都である。



1130年ノルマン人ルジューロ2世がパレルモを首都に「シチリア王国」を設立し、ナポリを中心とする南イタリアも制圧し「両シチリア王国」へと発展する。1282年「シチリアの晩鐘」(フランス・アンジュー家シャルル1世の重圧な支配に反発したパレルモ市民が復活祭月曜日の晩鐘時にフランス人排斥蜂起を起こす)で、アンジュー家は「ナポリ王

国」を治め、スペインのアラゴン王がシチリア王となる。ギリシア、ローマ時代から中世はフランス、スペインが統治する歴史的背景の上に栄えたナポリである。



1310年アンジュー家ロベール王と王妃マヨルカのサンチアが建てた「聖キアラ修道院マヨルカの回廊」には、当時の生活風景を描いた黄色と青が美しいマヨルカ陶器の柱が並び、抜ける青空の下でオレンジの木々を囲み、静かに時を過ごす場所である。

1606年5月ローマで殺人を犯したカラヴァッジョが最初に逃れたのが当時スペイン統治下にあったナポリ。画家としての名声はローマで頂点を迎え、逃亡者であるにも関わらずナポリでも多くの注文を受けた。安全のため(盗難の経験あり)1972年からカポデイモンテ美術館に保管されている「キリストの鞭打ち」はナポリのサン・ドメニコ・マッジョーレ教会内礼拝堂を飾るための注文で等身大のキリストを中央に配した286x213cmの大きな作品である。

残された資料によると1607年5月頃から制作に取り掛かり、描き上げたのは2度目のナポリ滞在1610年だと考えられている。中央の柱に縛られて首を垂れたキリストの肉体は光を受けて闇から浮かび上がり、鞭を打つ三人から遠い静かなところにいるようである。

(闇は光に勝たなかった。編者)

この「キリストの鞭打ち」と同時並行してナポリで描いたのが「七つの慈悲の行い」(1607年)だ。1602年七人のナポリ有力者の出資で「ピオ・モンテ・デッラ・ミゼリコルディア教会」建立が始まり、その中の一人ジョヴァン・バッティスタ・マンソが祭壇に飾る絵をカラヴァッジョに注文する。カラヴァッジョ作品中で最も高額の値段で発注された390x260cmの傑作である。

「七つの慈悲の行為」とは①飢えた人に





食べるものを与える。②のどが渴いた人に飲むものを与える。③裸の人に着るものを与える。④牢獄の人を訪問する。⑤病む人を看病する。⑥巡礼者を泊める。⑦死者を葬ることである。新約聖書マタイによる福音書25章35～36に書かれた六つの慈悲に死者を埋葬することを合わせた七つの慈悲で、マルタ島を目指していたカラヴァッジョに七枚を描く時間はなかっただろう。

一枚の絵に七つを詰め込んだ。暗いナポリの路地を舞台にナポリ庶民をモデルに七つの行為が描かれている。右端の若い娘は牢獄で餓死する刑を受けた父に母乳を与える「ローマの慈悲(娘ペローと父キモン)」である。松明を持っているのは聖職者で墓掘り人と足だけ見えている死者を葬ろうとしている。高価な服を着た男は自分のマントを裸の男に着せようとしている。ホタテ貝の付いた帽子は巡礼者で向かい合っている

男は指で泊まる宿を示している。二人の後ろにはろばの顎の骨の形をした細長い容器から水を飲む男(旧約聖書の士師記、古代イスラエルのサムソンを暗示)の姿がある。そして「慈悲の聖母と幼子キリスト」がナポリの密接する狭い家々の窓から路地を覗き込むかのように彼らを見守っている。二人の天使は絡み合って、止むことなく展開される人々の慈悲の行為を監督しているようである。

カラヴァッジョは時代と場所を超えた神の教えや「ローマの慈愛」を引用し、人として行すべき慈愛を描いている。二度と戻ることが出来なかったローマを追放されたカラヴァッジョにとって、飢えや渴き、泊まる宿、牢獄、死さえも決して他人事ではない自らの現実として生きていたに違いない。この一枚にはナポリのカラヴァッジョの思いが凝縮されているのではないだろうか。カラヴァッジョの新しさは明暗とレアリスムのテクニックを超えて、個人として、画家として、世界を捉え直す新しい道を開いたことだろうと思った。

2024年10月

古賀順子記

古賀さんから頂いたメール通信です。興味深いものが煮詰まっています。

今回ナポリに行って一番感動したのはナポリの人々が自分たちの文化を大切に守っていることでした。「アンジェロ」(天使)と呼ばれる地元ボランティアの方々が旅行者の道案内をしてくれます。音楽、美術、歴史からカフェまでナポリの観光をサポートすることでナポリをより良く知ってもらう市民活動です。

ナポリの守護聖人は聖ジェンナロです。4世紀初頭ディオクレティアヌス帝統治下に殉教し、斬首された時の血液を小さな容器二つに保存したそうです。血液は固まりましたが、1631年ヴェスヴィオ山が再び火山活動に入った時、固まっていた血液が液体となりマグマ噴火が治りナポリを護る奇跡が起こったそうです(アンジェロのお話)。

今もナポリの人にとって聖ジェンナロは身近な存在で、ナポリ大聖堂に接する聖ジェンナロ礼拝堂には素晴らしい宝物が納められ崇められています。

私が一週間泊まっていたアパートマンの隣には小さな教会があって、夕方18時の鐘になると近くの年配のマダムたちが7~8人マリア様に捧げるロザリオの祈りを謳っておられました。邪魔にならないように終わるまで待っていようと思ったのですが、祈りは一時間以上続き、入るのは翌日にしました。南イタリアの人々はとても敬虔だと分かりました。

その地に来てみなければ感じられないことが如何に多いかを実感しました。

「七つの慈悲の行い」も画像としては知っていましたが、実際に本物の前に立つと息を呑むほど圧倒されました。(詳しい解説に感謝です。编者)

ナポリの人はナポリの方言を話し、ナポリの音楽を愛し、北イタリアは嫌いだそうです。11月なのでアマルフィ海岸ではまだ海水浴をしていました。

明るい太陽と輝く青空のナポリ、また行きたいと思いました。(2024年11月11日)

